

## 実用化事例

# 陶磁器業の製品化支援

【相手先企業】 ①株式会社双葉企画 ②株式会社向山窯 ③かさましこ再生土の会

### 【開発の経緯・支援内容】

技術相談からはじまり、情報提供や技術支援などにより製品化につながっています。  
支援事例として、製品化のためのコーディネート、釉薬試験と調合例の提示、素地試験と設備開放について紹介します。

**【事例①】** 博物館ミュージアムショップへのグッズ卸業を営んでいる対象企業は、「福建一東アジアの海とシルクロードの拠点」という学術展覧会で初めて陶磁器を販売したいが、窯元への注文・商談がわからないということで相談があり、当所のコーディネートにより記念グッズとして商品化しました。

会場：学習院大学・明治大学・萩美術館（浦上記念館）等

期間：H21/4/13～10/12

記念グッズ：天目盃@1,500円×100点、魚紋皿@2,400円×20点、売上合計19万円

**【事例②】** 対象企業では、鮮やかな赤色釉薬の要望がありましたが、そのための調合と焼成条件はシビアなものがあります。釉薬の調合計算と焼成条件を技術提供したところ、試作した釉薬が商品化につながりました。また、劇毒物であるセレン・カドミウムを使わずに鮮やかな発色をする調合ですので安心して使っていただけます。併せて原料調達についても情報提供しました。

銅赤釉製品：@4,000円×20点、売上8万円。

新規釉薬によって商品価値の向上に寄与しました。

**【事例③】** 未来のための「エコな取組み」として笠間焼・益子焼の若手作家たち10名が立ち上げた団体かさましこ再生土の会（笠間市）は、陶磁器くずのリサイクル化に取り組んでいます。当所では、陶磁器くずの粉碎作業、焼成試験、吸水試験分析、安全性の評価をおとして支援しました。

会場：笠間焼フェア（10/10-12）

売上：@1,000円×5点×24社、合計12万円

原料枯渇とエコ社会など産地の将来像として来場者に認知されました。

事例①：天目盃



事例②銅赤釉



事例③かさましこ再生土の会  
（原料粉碎作業）



基礎となった事業 平成21年度 技術相談

現在の担当部門 工芸技術部門 主任 久野 亘央

tel : 0296-72-0316